

十輪院中世文献資料による調査結果〈元興寺文化財研究所〉

平成 28 年(2016) 3 月

(1)十輪院の開創

江戸時代成立の縁起では、元正天皇の頃（在位 715-724）に元興寺別院として善覚大徳によって開創されたとされている。善覚は元興寺の沙門であった。また善覚は朝野魚養と同一人物で、吉備真備の子であったと伝えられている。

魚養は現在薬師寺などに所蔵される「魚養経（大般若経六百巻の一部）」の書写者である。また魚養は弘法大師空海の書道の師匠とも言われるが、この点については未だ関連資料が見つかっていない。

(2)中世十輪院の成立

十輪院に関する文献資料は鎌倉期まで欠く。境内出土の常滑大甕は平安時代のもので、興福寺・藤原氏関係者の墓所が設けられていたと推測される。平安時代から中世都市奈良における納骨の場となっていた可能性がある。さらに都市住民の死者供養の場として、地藏霊場たる十輪院が寺容を整えていったと見られる。

文献資料で「十輪院」の名が確認できるのは『沙石集』（鎌倉時代）巻第七で、地藏信仰の霊場として成立していた。1331 年、元興寺が買い取った家地の在所として、「元興寺東郷十輪院之間」とあり、鎌倉期の段階で元興寺境内の外、東方の現在地に所在していたことが文献資料でも裏付けられる。

(3)室町・戦国時代の十輪院

室町期も十輪院は地藏霊場として名高く、1461 年大乘院門跡の尋尊が参詣し、その後も度々参詣している。1466 年当時の大乘院門跡の経覚も参詣した。尋尊の父一条兼良は 1469 年十輪院に行き、「(弘法) 大師の作る石仏等」を見物している。石仏龕が弘法大師自作のものとして広く知られた存在であった。

当時から真言宗であったと推測できるが、興福寺の影響下にもあった。十輪院周辺に成立した十輪院郷は興福寺が領主であった。十輪院僧が興福寺の法会に出仕し、また興福寺僧が十輪院での法会に参加していたことも文献で知られる。従って興福寺の末寺とされるが、京都・醍醐寺の末寺でもあった。

(4)都市寺院としての活況

十輪院周辺では、都市住人の共同体としての「十輪院郷」の活動が目立つようになる。門前地域の都市的発展があり、1483 年十輪院で久世舞（中世芸能の一種）が行われた。

境内には俗人も住していたため、「小屋」が乱立し火事もあった。当時はかなり広い寺域を有していた。江戸時代の資料では、十輪院町、十輪院畑町、東十輪院町の 3 ケ町はもと十輪院の境内で、東西二丁、南北一丁の広さを有していた。

当時は 10 前後の小規模な寺坊(庵)が集まって惣寺を形成していた。その後、その一部が隣接する法徳寺、興善寺など念仏系寺院として独立化していった。

戦国時代末期には、十輪院の衰退と念仏系寺院の成立により、16 世紀の終わり頃に惣寺は解体する。

(5)近世十輪院の復興

中世末期に豊臣秀長の寺領没収や戦乱などで十輪院はかなり荒廃したが、1602 年、徳川

家康より寺領 50 石の朱印地を認められ、法華寺村、肘塚村の一部が与えられた。以後、歴代将軍よりこの朱印地 50 石の安堵を受けることになった。

江戸時代初期ころ興福寺の末寺から離れ、真言宗寺院として純化し、京都醍醐寺報恩院の末寺となった。

真言寺院としての十輪院の中核は弘法大師を祀る御影堂(みえいどう)での御影講にあった。1613 年に地蔵堂(今の本堂)を再興した十輪院惣寺の寺僧集団は「御影供衆」であり、毎年 3 月 1 日に御影講が行われた。1678 年の『八重桜』には「弘法の暫時住たまひし聖跡なる故に、御影つくり毎年三月二十一日南都住居の真言宗僧会合して御影講を執行ふとそ」とあり、『奈良坊目拙解』は「当院毎年三月二十一日御影供法事有り、諸堂開帳参詣群衆たり」とその盛況ぶりを伝えている。十輪院の御影講は奈良の町でも一大行事であった。本来の地蔵信仰に加えて弘法大師信仰も盛んになった。

(6)十輪院の大編成

江戸時代の半ばまでは、「御影供衆」と呼ばれる寺僧らがそれぞれ寺坊を構え、寄り合って十輪院惣寺を構成していた。運営は、特定の住持(住職)を持たず、「御影供衆」の中から選出された複数人の年預(ねんよ 集会の責任者)が中心となっていた。

十輪院境内には享保年間まで僧房七宇があり、十輪院はそれらの「集会所」であったという。つまり十輪院を「集会所」として寄り合う 7 庵からなる惣寺組織が存在していた。

このような体制は享保年間に 7 庵が衰退し、十輪院に一元化されたシンプルな体制に転換する。1761 年に入寂した生覚を十輪院の住持としている。新生十輪院の中興第一世である。以降は住持を中心に十輪院の運営がなされていくことになる。

(7)新生十輪院の歴代

第 1 世	生覚	1761 年 6 月 4 日入寂。7 庵の一つ法寿庵の法流につながっている。
第 2 世	生空	1779 年 7 月 4 日入寂。地蔵堂覆堂修復を行う。
第 3 世	生海	1791 年 4 月 12 日入寂。十輪院の由緒を再編集。
第 4 世	生賢	1817 年 5 月 13 日入寂。堂宇修復や境内整備の事業を行う。
第 5 世	生識	1838 年 3 月 16 日入寂。地蔵菩薩像引導の過去霊名簿を作成。
第 6 世	法如	入寂年不詳。「当寺代々過去帳」に歴代住持らの情報を加筆。
第 7 世	快助	1872 年 10 月 22 日入寂。忍辱山円成寺出身。曼荼羅図など補修。
第 8 世	識運	1892 年(明治 25 年)入寂
第 9 世	秀栄	1933 年(昭和 8 年)入寂
第 10 世	溪聲	1949 年(昭和 24 年 1 月 8 日)入寂
第 11 世	純道	2005 年(平成 17 年 6 月 13 日)入寂
第 12 世	純信	現住

(8)江戸時代における信仰の展開

江戸時代に成立した十輪院縁起が 4 点残されている。これらの縁起を通して十輪院の由緒は広く発信されていった。その説く内容の特徴は、弘法大師所縁の地としての由緒の強調と本尊地蔵菩薩像前での引導作法の流布といったところにある。

1800 年の開版された「南京洛中洛外弘法大師八十八ヶ所巡拝図」では、十輪院が第一番の札所になっている。一方、本尊地蔵菩薩像前での引導作法について縁起は、「昔は此の宗、他の宗隔てなく、新亡の棺あるいは骨その上に置き云々」などと記されている。